



平成26年度小樽商科大学学術研究奨励事業
第9回「学生論文賞」

国立大学法人

小樽商科大学教育開発センター

小樽商科大学ビジネス創造センター (CBC)

目 次

総 評.....	1
審査結果一覧.....	2
ヘルメス賞及び優秀賞講評	4
審査員一覧	7

総 評

学生論文賞実施委員会
委員長 穴沢 眞

今年度は、学部生部門に46編に応募がありました。学部所属学科では商学科が25編と最多で、続いて社会情報学科から11編、経済学科から7編、企業法学科からも3編の応募がありました。

審査は、プレゼンテーションによる1次審査と論文審査による2次審査の2段階からなります。第1次審査の発表数は46編（学部学生46編）で、延べ103名の教員が審査にあたりました。第2次審査は1次審査を通過した23編が対象となり、延べ46人の教員が審査を行いました。厳正なる2段階審査の結果、学部生部門では、大賞となるヘルメス賞1編、優秀賞7編、奨励賞4編となりました。学部生部門の優秀賞7編のうち1編は、1次審査のプレゼンテーションで最上位の得点を得た論文に授与されるプレゼン賞とのダブル受賞となりました。実施委員会において特徴的な評価を得た論文に対して与えられる特別賞は今年度、該当する論文がありませんでした。

上位入賞者の論文は、特に2次審査において査読担当者から高い評価を得ています。「論文の形式・アプローチ・方法論」、「論理構成」、「テーマ設定」、「オリジナリティ」の点で、奨励賞受賞論文に比べて全体として高い評価が与えられています。奨励賞受賞論文は、これらの点でいくつか低い評価が下されていることが指摘されます。特に、先行研究のレビュー不足や論文全体の論理構成の弱さが評価を下げる要素となっています。高いレベルの論文を目指す学生の皆さんには、応募に当たり、論文執筆の基本的な様式のほか、テーマのユニークさを「独りよがり」ではなく客観化・相対化するための理論的な裏づけを十分に意識することを心掛けてください。

本論文賞では、2段階審査のいずれにおいても、応募者への評価のフィードバックが行われています。これは論文執筆のノウハウや研究能力のレベルの向上につながるものですので、ぜひ今後に役立てていただきたいと思います。

本年度もご多忙中、審査にご協力いただいた教員の方々には、厚く御礼を申し上げますと共に、来年度も是非ご協力いただくようお願いいたします。

最後になりましたが、本論文賞の実施に当たりまして、株式会社北洋銀行様より例年と変わらぬ多大なご支援を頂戴いたしました。記して感謝の意を表します。

審査結果一覧

(学部生の部)

ヘルメス賞

「成員の動機付け要因に関する理念統合モデルの考察-未来工業の事例分析-」 宇佐美亜莉抄

優秀賞

「マルチエージェントシミュレーションを用いた観光回遊行動の分析」 大滝 恵太

「事業継承における経営理念と組織の統合破たんメカニズム
—米スターバックスの事例から—」 清水 美鳥

「費用便益分析を用いた排雪頻度の最適化に関する研究
-札幌市を事例として-」 二木 涼

「企業ドメインと企業革新プロセスの関係性-タニタの戦略展開プロセスを通じて-」 柴田 晃里

「ファミリービジネスにおける経営者継承のダイナミズム
—トヨタ自動車の「4C」分析—」 前野 初美

「子どもの貧困解決 金融面からのアプローチ—奨学金ファンドの提案—」 續木 翔子

「地域創生と企業家活動 —沖縄ツーリストの事例分析—」 田中 しおり

奨励賞

「戦略的 CSR における SBU の活用
-サッポロビール北海道本社との地域共創の事例から-」 庵 彩乃

「地方都市における高齢者の“居場所”に関する研究」 笹島 理子

「数値が与える市場株価形成の歪みの有無」 甲坂 勇希

「製造中小企業の自社製品開発による脱下請戦略—大橋製作所の事例—」
青木 昂平
小原 亜由美
鎌田 大志
流 みゆき
成田 早来

ベスト・プレゼンテーション賞

「費用便益分析を用いた排雪頻度の最適化に関する研究
-札幌市を事例として-

二木 涼

ヘルメス賞及び優秀賞論文講評

学部生の部

ヘルメス賞

「成員の動機付け要因に関する理念統合モデルの考察-未来工業の事例分析-」
宇佐美亜莉抄

経済の長期低迷、社員を食い物にするブラック企業のニュースに慣れてしまった我々にとって、70歳までの雇用保証、年間休日140日など、未来工業社の高い労働条件はひときわ眩しく存在である。しかしハーズバーグの古典的な動機づけ論の知見に立ち返って考えれば、破格的処遇にばかり目を奪われる世間の理解には重大な欠陥がある。それは、社員に不満を生じさせない要因ではあっても、仕事へのやる気を引き出す要因としては十分ではないからだ。この優良企業の強さを説明するには、高い処遇をふまえて社員にどのように仕事を与え、進めていくかという仕事管理の在り方、経営者のリーダーシップの在り方に目を向けねばならない。

以上が本論文のベース、着眼点である。古典の知見を借りて、話題になっている事例の再解釈を試みる着想力は、大学院生に引けを取らない。論文構成も学術論文の体裁を整えており好印象だ。だが、着想や体裁に見合った深みある分析内容を伴わないのは残念だ。ハーズバーグのほかに、何人かの著作から理論を借りてきてはいるが、互いにどのようなロジックでつながるのか、その筋道が見えない。同社の仕事管理に対する説明や解釈も断片的で皮相な印象を拭えない。そういう意味では、所詮、学部生の習作である。

とはいえ、この論文を最初に手にしたときの印象があまりにも良かった。現実の事例を見て理論と照合してみるのは高度な知的習慣である。それを身につけたなら、ほめてあげたい。

優秀賞

「マルチエージェントシミュレーションを用いた観光回遊行動の分析」 大滝 恵太

本論文は、観光地における観光者の観光回遊行動に与える要因を明らかにすることを目的としている。モバイル端末等が普及した現代の高度情報化社会において、観光行動においても”情報“が極めて重要となってきた。そこで本研究においては、その観光情報に着目し、これまで詳細な検討が行われてこなかった観光回遊行動をコンピュータ・シミュレーションにより分析している。研究テーマの設定や分析方法などに関しては、学部学生が行った研究としては十分に評価できる内容である。

一方で、シミュレーション対象としている観光都市は仮想都市となっており、実際の観光都市における観光回遊行動としての具体的な議論を行うことは難しい。また、実際の観光回遊行動モデルは、提案されているアルゴリズムと比較して、もっと複雑であることが予想されることから、実際の観光者が行う回遊行動を何らかの方法で観察・記録し、当該行動モデルの詳細な検討を行う必要がある。

以上のように一部に課題は認められるものの、適切な条件を設定したうえでシミュレーション分析が行われ、その結果、興味深い知見を得られており、優秀賞に値する優れた論文である。

「事業継承における経営理念と組織の統合破たんメカニズム—米スターバックスの事例から—」 清水 美鳥

本研究は、組織の事業継承の過程で理念統合が破たんするメカニズム、および再統合のメカニズムを明らかにすることを目的としている。明確な問題意識の設定、重要概念の把握を意識した文献レビュー、理論的基盤をはっきりさせた分析フレームワークの設定に基づく事例分析が行われており、実証研究としてしっかりした形式を備えた論文となっている。

本研究の内容については、経営理念の浸透に関わる研究における未開拓な領域を明確化した点に独自性が認められる。また、理論的に深い理解を必要とするセンスメーカーなどの組織の認知や解釈システムに関わる概念を適切に定義・解釈し、意味解釈に関わる独自の理論的視点を取り込んだフレームワークを設定することで、スターバックの中で生じた理念の破たんと統合プロセスの深層を明らかにしている。このような点から、本研究は組織の認識論に対する新しい視点を提供した研究であると考えられ、受賞に値する論文として高く評価される。

「費用便益分析を用いた排雪頻度の最適化に関する研究-札幌市を事例として-」 二木 涼

本論文は、札幌市内の車道における排雪を研究対象として、地区や道路ごとに排雪方法や頻度の変更によって、排雪費用の削減が可能かどうかを明らかにすることを目的としている。本論文の目的を達成するために、まず、札幌市の除排雪体制の現状が明らかにされている。次いで、適宜ヒアリングを通じて入手した情報を用いながら、排雪頻度の変化に応じた費用および便益を見積もった上で、排雪頻度の変化による費用の変化を推定している。

排雪の出動基準に着目しつつ費用分析を行った結果として、排雪体制や使用される機械を一定と仮定した場合、排雪頻度を高めるほど、より効率的な運搬排雪を実行できることを提示している。

排雪に関して、札幌市の財政が逼迫する中、除雪作業従事者の高齢化、除雪機械の老朽化、ダンプロトラック不足といった課題も生じている。本論文は、大きな社会問題の会計に向けての一定の貢献を果たしていると考えられる。今回の分析では対象外となった変数や、他都市との比較も考慮しながら、研究をさらに発展させていくことが期待される。

「企業ドメインと企業革新プロセスの関係性-タニタの戦略展開プロセスを通じて-」 柴田 晃里

本論文は、タニタを事例研究の対象にしなが、事業ドメインと革新の戦略的創造プロセスの観点から、企業成長の仕組みを考察することを目的とするものである。企業革新モデルに関わる戦略的企業革新、進化論モデル、誘発的自己組織の理論、ならびに企業セオリーについての先行研究レビュー、それに基づいた分析フレームの設定、タニタを対象とした時系列の事例分析、そして事例分析を踏まえた理論的考察、という一連のフローは説得的である。とくに企業ドメインと企業革新プロセスを事例分析により関連づけようとした点、論題に関する詳細な文献レビューを行った点、そして企業セオリーが生み出す価値創造の態様を明らかにした点は高く評価される。その一方で、本論文はタニタを事例分析の対象とすることの理論的根拠が不明確である点、企業ドメインの変革プロセスが外部環境の変化と遮断されて考察されている点など、いくつかの問題を含んでいる。しかしながら、総体的に学部学生の論文としては、優秀賞に十分値する優れた研究である。

「ファミリービジネスにおける経営者継承のダイナミズム—トヨタ自動車の「4C」分析—」
前野 初美

本論文は、ファミリービジネスにおける経営者継承と戦略創造との関連を研究した論文である。

経営者の交代と経営戦略の創造・展開とがどのように関連しているかという点は、一般のビジネスと同様にファミリービジネスにおいても非常に興味深いテーマである。

先行研究レビューから「4Cモデル」という説明モデルを導出し、それに依拠して事例を分析している。事例として、トヨタ自動車の第6代社長から第11代社長までの時期(1982年～現在)を取り上げている。そして、「4Cモデル」を利用して、各々の社長の代の戦略的特徴を析出している。

問題意識・研究目的の提示から先行研究レビュー、モデル提示、事例分析、考察そして結論に至る流れは、学術論文としての要件を備えている。また、抽象的概念を駆使して現実の事象を説明・解釈しようと試みている点は、学問的思考の試みとして評価しうる。

改善すべき点としては、概念内容や概念相互の関係の一層の明確化、説明の丁寧さや説得力の一層の向上、引用注の表記の改善を指摘できるが、学部学生の論文としては意欲的な優れた論文である。

「子どもの貧困解決 金融面からのアプローチ—奨学金ファンドの提案—」 續木 翔子

本論文は今日の日本社会においては経済的格差が教育格差をもたらしているという認識に基づき、子供たちが資力に関わらず、等しく教育を受けることを可能にする社会的な仕組み、すなわち奨学金ファンドを提唱するものである。そして本論文は筆者自身の個人的経験を背景に、強い問題意識に支えられているため、読者に対し説得な論旨となっている。

また、奨学金ファンドが必要である説明するに際し、既存の制度の長所短所や諸外国の例を紹介したりするなど、幅広く文献、資料を参考にすることが伺われる。このように良く調べたうえで、既存の制度では教育の機会平等が達成できないことを分析した点も高く評価できる。一方で、なぜ、日本では資力により学習の機会に差が生じるのか、あるいは、なぜ、日本の高等教育は個人に重い負担を課すのかといった根源的な問題に対する視点がやや不足している点が惜しまれる。とはいえ、先述のとおり、明確な問題意識をもって、あるべき制度設計を提言する本論文は卒業論文として優れており、優秀賞に値する。

「地域創生と企業家活動 —沖縄ツーリストの事例分析—」 田中 しおり

本論文は、我が国の地域活性化に対する新産業創出、地域イノベーションの必要性に触れ、その担い手は企業家であり、企業家活動が形成するプラットフォームによる地域資源の活用が如何にして地域創生に結びつくかという点について、沖縄ツーリストの事例分析を交え論じているものである。

先行研究レビューから企業家の定義、企業家の4つの企業モデルを整理し、社際企業家や地域の課題解決を図る市民企業家が構築するネットワークの重要性を導いている点は理論的であり、また企業家活動Ⅱによる企業家プラットフォームは地域資源を結び付け、地域クラスターの形成・展開の促進が地域活性化につながるとの指摘は昨今の社会情勢を考慮して、価値のある論文である。

一方で、沖縄ツーリストの事例では閑散期とインバウンドについての地域的な課題を示し、これらに対応する沖縄ツーリストの機能を企業家活動Ⅱの視点で分析し、プラットフォームの形成が最終的に地域の問題解決・活性化につながると結論付けているが、現地でのヒアリング調査などがあると説得力が増したであろう。とは言え、問題意識を提示し、地域の課題に対する企業家の役割について十分示唆に富む論文である。

審査員一覧

1次審査員一覧 (50音順)

穴沢 眞	生垣 琴絵	奥田 和重	片桐 由喜	河森 計二
木村 泰知	久保田 顕二	齋藤 一朗	澤田 芳郎	高田 聡
田中 晋矢	中島 大輔	中津川 雅宣	篠本 智之	原口 和也
林 松国	和田 健夫			(以上 17名)

2次審査員一覧 (50音順)

阿部 孝太郎	石崎 香理	猪口 純路	岩本 尚禧	江頭 進
大津 晶	奥田 和重	小田 福男	乙政 佐吉	加賀田 和宏
片桐 由喜	加藤 敬太	上山 晋平	北川 泰治郎	金 鎔基
近藤 公彦	齋藤 一朗	佐藤 雅浩	佐山 公一	鈴木 和宏
杉山 成	高田 聡	高宮城 朝則	玉井 健一	辻 義人
中川 喜直	永下 泰之	中島 大輔	林 松国	深田 秀実
プラート・カロラス	劉 慶豊			(以上 32名)